

若狭のビーチ、 アジア初「ブルーフラッグ」 認証取得

夏!といえば海水浴。

関西の人に馴染み深いのが、福井県・若狭の海だ。その中の一つ、高浜町の「若狭和田ビーチ」が今春4月、国際環境認証「ブルーフラッグ」をアジアで初めて取得した。

若狭高浜観光協会事務局長の吉岡 久さんに、このアジア初の快挙について聞いた。



それは1通のメールから
始まった

全長およそ1kmにわたって続く白い砂浜と青い海——若狭和田ビーチが、この快挙に至った経緯は3年前、高浜町役場に届いた1通のメールに遡る。もともと環境省の「快水浴場100選」にも選ばれていたことから、「海外にブルーフラッグというのがあるが、興味ありますか」と国内での認証団体より連絡があり、それを受け取った役場職員が「これだ」と聞いたところから、認証取得への挑

ブルーフラッグを取得している国の数



戦が始まった。取得できれば「アジア初」というのは大きな魅力だった。

賑わいを再び

観光協会としても「海の美しさを客観的に表して観光客を誘致するための旗印がほしかった」と吉

ブルーフラッグ。今年は7月9日から8月20日までビーチに掲げられる

岡さん。

実はビーチの最盛期は40年ほど前。当時はひと夏で約150万人の海水浴客で賑わっていたが、昨年は僅か20万人。日焼けはイヤ、清潔志向で砂もイヤという人が増え、海水浴は夏のレジャーの定番ではなくなった。最盛期には400軒以上あった民宿も150軒に減り、マナーの悪い利用者が増加。民宿や浜茶屋など事業者だけではビーチの維持管理は難しくなっていた。身近すぎて海に親しむ機会がない地元の人も増えていた。

美しい海を次世代に
どう引き継ぐか

地元の海を子供たちにもっと知ってもらい、次の世代に引き継ぐにはどうするか。地域の人々や観光客も巻き込んで、どう維持管理していくか。それは切迫した課題だった。

ブルーフラッグは単に環境保全

だけでなく、地域で持続可能な体制をつくり、自然も含めて維持管理していくという姿勢。つまり地域づくりをめざしたものであったことが、「町の問題意識と一致した」という。

4カテゴリー33の基準に挑む

85年にフランスで誕生したブルーフラッグは、既に世界約50カ国、約4000カ所のビーチやマ

リーナで取得されている国際的な環境認証制度。①水質、②環境教育と情報、③環境マネジメント、④安全・サービスの4カテゴリー33の基準をもとに審査され、基準をクリアすれば認証取得、その証明であるブルーフラッグをビーチに掲げることができる。

もともと水は文句なしにキレイ。最大の難関がクリアできそうだったため、挑戦を決めたが、「改めてそれまでの関係者の努力の積み重ねを実感した」(吉岡さん)

ともあれ、行政と地元の保安署・警察・消防をはじめ漁協や観光業者などで構成する「安全・安心な海構築会議」と、実行部隊として



若狭和田ビーチ

「ブルーフラッグ推進部会」を設け、毎月何度も集まって課題を一つ一つ潰していった。

超エクセレントな水質と環境教育

自慢の水質は、例えば糞便性大腸菌が100ml中250個以下ならエクセレントのところ、和田ビーチはなんと最大で僅か5個。遠浅の海はどこまでも透き通り、透明度の高さも比類ない。早くから公共下水が整備され、流入する川がなく雨水も大量に流れ込まない地形も幸いしたそうだ。

環境教育については、地元の公民館活動が充実していたことに加え、海の生き物観察会を長くボランティアで続けてこられた福井県立大学教授の協力を得ることができ、海水浴客に対して環境教育を



上から水質調査(透明度)、
バリアフリー改修した救護所、
水陸両用車椅子
「ヒッポキャンプ」

実施する体制も整えた。利用者が守るべきルールも、既に制定済の条例をベースに充実。ビーチに情報掲示板も新設した。

ライフセーバーの活躍

安全・サービスについては、以前から夏の間は主に海上から海を守る日赤水難救助員会が居るほか、9年前からライフセーバーも活動を開始。新たにバリアフリートイレと車椅子対応の駐車場をつくり、車椅子のまま海まで行けるよう水陸両用の車椅子も準備した。

環境マネジメントとして美しい砂浜を維持するため、海水浴期間

中は毎夕16時にライフセーバーが呼びかけて10分か15分間、海水浴客も一緒になってビーチクリーン活動を実施。

認証取得と維持には実績の積み重ねが重要で、海水浴期間中は国際基準に則って定期的にゴミ量を測定。10m×10m区画に10cm以上のゴミが5個以上あるとNG、区画内の任意の1m×1m区画に10cm以下のゴミが5個以上あるとNGという厳しさに加え、認証団体の審査員による抜き打ちチェックも入る。

これらの基準が満足できないと旗を降ろさなければならず、再度基準クリアを証明できるまで再び掲げることができない。

町を挙げた推進姿勢

取得への過程で最も苦労したのが町の人々へのアナウンス。なかなか人々の理解が進まないなかで、住民説明会やシンポジウムを開催、町は各戸配布の広報誌も発行。地元小学校の協力を得て、授業でブルーフラッグを採りあげてもらったなど精力的に活動した。

苦労の甲斐あって認証取得時には、国際審査委員より「小さいながら町を挙げてやっている点が素晴らしい」との評価も受けた。

誇れる海、誇りを持てる町に

取得により知名度は確実に上がり、地元や周辺市町の小中学校の

遠足をはじめ、ライフセーバーの全国大会も誘致できた。何らかの形で協賛したいという企業からの問合せもあり、地元ビジネスがステッパアップできる兆しも見えている。浜茶屋はブルーフラッグをイメージしたメニューづくりに取り組み、別途検討中のデザインコードに合わせた改修の動きも出ている。

「息長く末永く、観光客も一緒に美しい海を守りたい。何より地元の子供たちが、世界に誇れる海があると自分たちの町を誇りに思えるようになれば一番嬉しい」と吉岡さん。

多様なビーチの楽しみ方

高浜町には若狭和田ビーチを含め八つのビーチがある。町では、今後他のビーチでもブルーフラッグ取得を掲げていくことを考えているが、一方で、従来型の海水浴にこだわらず、多様な海の楽しみを提供していくことも期待される。観光協会では既にシーカヤックなどのメニュー化も進めており、今後は各ビーチの特性を生かした魅力づくりにも取り組んでいきたい、という。

加えて実は海の透明度が最も上がるのは、春と秋。夏だけでなく、別の季節にも訪れてほしい、そしてこんなにも素晴らしい海があるから高浜に住みたいという人が増えてほしい。既にここで活躍しているライフセーバーは他府県からのインターン者も多いと、自身もインターン組の吉岡さんは笑った。



体験アクティビティ(SUP・シーカヤック)



若狭和田ビーチ。透明度が高く超エクセレントな水質



ライフセーバー(上)と水難救助員